

木村木材工業 ムク 枠材 に こ だ わ る

枠材では我が国トップメーカー

木村木材工業(埼玉県鴻巣市、木村司社長)は、現在、関東地方唯一のJAS人工乾燥造作用製材認定工場で、ムク(米ツガ、米ヒバ)の造作材生産量では日本一のメーカー。したがってマンション用窓枠、ドア枠、押し入れ材等の造作材では首都圏のトップメーカーでもある。そのほか、山林、木材小売り部門をもち、プレカット加工も行っている。一方で同社は昨年12月に創立100周年を迎えたセンチュリー企業であり、現社長は4代目となる。事業内容が時代とともに、製材、素材生産、外材輸入、木材小売り、マンション造作製材・納材、プレカット加工等に変遷しつつも、創業以来、ムク材にこだわりを持ち、今なお頑なにその矜持を崩していない。むしろそのこだわりが、これからのエコ時代にマッチしつつある企業であるとも言える。

同社の業容は、第1事業部(マンション用造作材生産・納入)、第2事業部(戸建て住宅向け資材販売、プレカット加工)、第3事業部(山林伐採等素材生産)、第4事業部(不動産管理部門)の4事業部体制で、事業本部・鴻巣ランバーターミナル(埼玉県北本市)、埼玉店(埼玉県本庄市)、プレカットセンター(北本)、秩父営業所(山林部、埼玉県秩父郡小鹿野町)がある。

人員と売上金額は、第1事業部が36人で9億円、第2事業部が18人(プレカット工場含む)で10億円、第3事業部が5人で億円。

創業は、明治38年に初代木村柳蔵氏が埼玉県鴻巣市で木材業を開業したことに始まる。

第1事業部のマンション造作材の生産は、昭和30年に住宅公団アパートの造作材を手がけたことが始まり。その後、この分野へ進出して行く。38年に隣接の北本市に工場を新設・移転業容を拡大。58年に乾燥機2台を相次いで

導入し、早くも木材製品の乾燥化に取り組む。61年にはさらに乾燥機1台を追加導入し、合計3台体制とする。その後も平成8年にUV塗装設備を設置するなど、マンション造作用の加工設備は全くそろっている。製品の顧客の要望に応えられないことはまずないという。既製品は生産しておらず、オーダーメイド。1本(丁)からでも作る。長さは400~6,000^{mm}、厚みは6~70^{mm}、幅は30~240^{mm}。製品サイズは多種多様。全て柵で見付け無地。月間160~170^{m³}、年間で2,000^{m³}を生産する。

第2事業部の木材小売り部門は、当然のごとく戦後間もなく事業を再開した時からの主事業。先行き資材販売だけでは木材小売業が先行きギリ貧状態に陥ると判断し構造材の販売量を維持継続して行くために、平成2年プレカット加工機を導入・設置し木材小売り部門を強化した。翌3年にプレカット加工2号機を導入。6年には柱材加工専用機を追加導入。15年には羽柄材加工機も導入。さらに16年には横架材加工ラインを更新し、同時に登り梁・斜め梁加工機も導入している。現在の加工能力は月間1,500坪も、1シフト1,000坪の加工にとどまっている。機械を更新してからフル稼働はしていないが、それでもプレカットの導入は小売り部門に大きな影響を与えている。導入していなければ、構造材が同社の小売り部門を流通しなくなり、売上金額が大きく落ち込んでいたのは間違いないからだ。

木村木材工業株式会社の概要

本社住所	埼玉県鴻巣市本町3-8-37
代表者	木村司
電話	0485-42-8111
F A X	0485-42-0809
ホームページ	http://www.kimuramokuzai.com
創業	明治38年(法人化昭和24年)
資本金	1,700万円
事業内容	製材、ムク木材のマンション造作材生産、木材・建材販売、プレカット、素材生産・販売
従業員数	60人
売上高	24億円(16年)

第3事業部の山林部門は、大正7年に製材工場を開設した頃からのもの。戦後は国産材の素材生産に業を戻し、42年に秩父営業所を開設。生産性と素材生産のコストダウンのために、平成6年にプロセッサ（造材機）とハーベスター（伐採造材機）を導入し、大幅なコストダウンに成功している。現在は秋田県から静岡県までの範囲で杉・桧等の立木を伐採し、素材を原木市場や製材工場に納入する。

現社長は4代目。同氏は昭和40年生まれて、62年に大学卒業後、立石電機（現オムロン株）へ。5年後の平成4年に木村木材工業に入社し業界入りした。「昨年で会社創立100周年を迎えたが、由緒じゃ飯は食えない時代です」（木村社長）と、自社の状況を見る目は厳しい。というのは、同社の売り上げ高が平成9年には37億円あったものが16年には24億円まで減少しているからだ。売上金額の減少の原因は2つある。素材・木材製品の価格低迷と主力製品であるマンション向けムク材の売り上げ高が落ちている。

材価の低迷は国内全体がデフレ現象下にあつては致し方ない部分があるが、ムク材材の販売減少は痛手だ。ではなぜムク材が減少しているのか、それは平成に入ってから芯材の上にプラスチックシートをラッピングした材が使われるようになってきたからである。ラッピング材は化粧シートを貼ってあるのできれいで見栄えはいいし、塗装より手間は掛からないのでコストが安いために、急速に普及している。では、同社ほどの設備がそろっている工場であればラッピングの材を作ることにはさほど難しくないとと思われるが、作る気はないという。

その理由は、シートラッピング材は環境負荷が大き過ぎるというのだ。

親の世代が作ったものを子供の世代に処理させることをしたくない。産廃業者でさえラッピング材の処理・分別にはプラスチックシートと芯材を分離しなければならないため

に非常に手間が掛かる」と嘆いている。「このラッピング材を処理する費用は、将来、施主が負担しなければならぬのは分り切ったこと。そういうものを生産・販売したくない。自分が使いたくないものを作るということは、私は出来ない」と同氏は断言する。

加えて、最近、マンションの下枠は足で踏まれるためにラッピング材ではなくラミン材をウレタン塗装して使っているが、この取り扱いも中止したという。日本に輸入されているラミン材の大半が違法伐採によるものだという判断からだ。これらを使用したいという顧客が現れても「当社では扱いません」と答えるという。「経営者の姿勢が顧客を選別することになってかまわない。むしろ、その企業の客層は経営者の姿勢を反映するのでは」と言う。

では、同氏が使いたくなるような窓枠材とは。それは同社が現在売り出している「本物の窓枠」だ。その本物の窓枠材は、ムク木材を柁に製材し、蜜蝋のワックスで仕上げたもの。

柁でなければいけないのは、①板目は反り曲がりが出やすい（柁目材は反り曲がりが出にくい）②板目は外側（壁側）と内側（室内側）とが通気しづらい（柁目は年輪部分が縦に通っているために通気しやすい）からだ。蜜蝋ワックスにこだわるのは、破水機能があるうえに木材の通気性を損なわないため。一方、ウレタン塗料等の化学塗料を使った塗装は、色指定が可能で塗料が膜を作ってくれるためにきれいで木材を保護することができるが、木材の最大の特徴・長所である調湿機能が失われてしまうからという。

同社はウェブサイト (<http://www.kimura-mokuzai.com>) をリニューアルした。自信を持って勧めることのできる新製品を、一般の人たちに訴えるためだ。そして同サイトには社員全員の顔写真を掲載してある。サイト見学者に親近感を持ってもらうことと、社員全員が自信を持って販売できるようにと。 ■